

3-11		主題	「ハード」の壁は、「ハート」で乗り越えます！	
グループケア		副題	既存の従来型特養における小グループケアの取り組み	
脱マニュアル				
研究期間	10ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム フェローホームズ	
発表者：原崎望（はらさきのぞみ）			アドバイザー：新妻俊男（にいつまとしお）	
共同研究者：関根宏美・藤井美香・高橋久美・石井幸雄・田中美紀				
電話	042-523-7601	メール	info@fellow-homes.or.jp	
FAX	042-523-7605	URL	http://www.fellow-homes.or.jp	

今回発表の事業所やサービスの紹介	立川市で平成4年に従来型特養を開設。昭和記念公園の南側に位置し、緑あふれる環境のもと、『ひとは全てのために、全てはひとつのために』という法人理念に基づいて、家庭的な雰囲気大切に介護を行っています。 来年は開設20周年の節目の年です。平成24年4月には、完全ユニット型のフロアを増床します。
------------------	--

《研究前の状況と課題》 1フロア約50名。4人部屋、廊下、ホール、それしかない。いかにも「従来型特養」。個別ケアを目指して取り組んでいるのだが、なかなか画一的なケアから脱却しきれない。 ●利用者はすべてホール1か所に集められ、ただ食事を待っている。 ●食事、排泄などが、ケアごとに、時系列の分業体制で行われている。 ●「時間ですよ、トイレに行きましょう。」 こんな状況を打破すべく、「ユニット化」、「小グループ化」を、数年前から何度も検討してきた。ただ、そこにはハード面の問題が。ホール以外に、利用者が過ごせるスペースを確保できないのである。 どうすれば施設の画一的なケアから脱却できるのか。これが、職員共通の大きな悩みであった。	《研究の目標と期待する成果》 時系列の画一的な施設ケアから脱却して、利用者個々が、その人らしい生活を送れるような特養になる。そのために、 ●「時間だから〇〇する」ではなく、利用者のペースに合わせた個別支援を行う。 ●一人の利用者の食事や排泄などを、分業ではなく一人の職員が一貫して関わることで、利用者の生活全体をみる視点を養う。 以上の実践目標を掲げた。そして、これらを実現するには、50名という介護単位ではなく、もっと介護単位を小さくする、すなわち「小グループ化」が必要だと考えた。 ハード面の制約はあるものの、現状の施設ケアを変えるきっかけとして、従来型特養の中に、モデルケースとして小グループを1つつくってみることにした。
---	---

《具体的な取り組みの内容》

- 22年8月、スタッフ会議。小グループ化の意義と取り組み概要を確認。
- 22年9月、小グループ推進メンバー選定。
- 22年10月～11月、推進メンバー中心に、取り組み内容の具体化。
- 22年12月、2週間の試行→課題抽出。

- ① 利用者選定の段階で、現時点での介助量にばかり目がいき、小グループでどんなケアを目指すのか、意思統一ができなかった。
→利用者個々のケア目標を明確化した。
- ② 居室入口周辺とその前の廊下をあわせて、食事等のスペースとしたが、それでは十分な広さが確保できなかった。
→毎朝、ベッドを居室奥にまとめるようにして、居室内のスペースを確保した。
- ③ 「マニュアルがなければ、何時に何をするのか分からない」という職員がいた。
→「排泄チェック」「食事チェック」など、ケアごとの記録ではなく、利用者の生活全体の流れを詳細に記録できる書式を整備して、個々の生活リズム把握に努め、それに基づく日課を検討することにした。

- 23年1月、スタッフ会議で、取り組みの象徴となるグループ名を話し合い、「柊（ひいらぎ）」という名前に決定した。
- 23年2月から、全職員の共通理解を得て、正式に小グループケアを開始。

《取り組みの結果と評価》

- 小グループケアに取り組んでみて、今まで自分達がいかにマニュアルに依存していたかということに気づかされた。
- 現在の「柊」では、マニュアルがなくても、利用者個々の生活リズムにそった関わりができるようになっている。
- 利用者の生活全体に関わることによって、ちょっとした動きに気づけるようになり、そこから利用者ニーズを汲み取れるようになってきた。
- 利用者の表情が、以前よりも明るくなった。
- 職員の創意工夫によって、ハード面の制約も、何とか乗り越えることができた。
- 取り組み全体を通して、職員が話し合いを重ねて困難を克服したことによって、職員が一つになり、モチベーションも向上した。
- 職員の中に、「柊でできることは、特養本体でもできるのではないか」という意識が芽生えつつある。

《まとめ》

- ハード面での制約は、ケア向上を妨げる壁ではなかった。では、本当の壁は、どこにあったのだろうか。
- モデルケースとしての小グループケアは、一定の成果を挙げられたと考えているが、それを特養全体に広げていくことが、今後の大きな課題である。

《提案と発信》

与えられたハードの中で何ができるか、ではなく、職員としてどんなことをやってみたくて、そのためにどんな設備が必要なのかという考え方が大切。私たちは、今回の取り組みをベースに、既存施設の改修に取り組みます。利用者への深い愛情、職員としての想いを表現できるような改修にしたいと思っています。ハートのあるハード。これが、私たちの目指す形です。

【メモ欄】